



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中國思想史に関する研究：思想史へのアプローチ
Author(s)	莫, 寒
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16971号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16971
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99815
Type	doctoral thesis
File Information	Han_Mo_summary.pdf, 全文の要約



學位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文學） 氏名： 莫 寒

學位論文題名

中國思想史に關する研究——思想史へのアプローチ——

・本論文の觀點と方法

本研究では、中國思想史（哲學史）を俯瞰して、中國思想史における方法論（思想史へのアプローチ）を探究することを目的としたものである。中國思想史という研究分野において、最大の難點は、汗牛充棟である資料を如何に整理し、その上で獨立的敘述を構築することである。そこで本研究は、「思想的論争」に着目する。すなわち、ある思想が激しい論争を経て如何に定着するのかという過程を敘述し、具體的な問題をめぐる争点から諸學者の思想的基盤を解明することにより、中國學術における「百家争鳴」の實態を歸納的に考察する。具體的には、五つの問題点について論述する。①「北辰」における天文家と儒家の認識と論争について論述する。②道家の「無爲而無不爲」における先秦から漢初まで思想の變遷について論述する。③坤卦初六の爻辭における文言傳の解釋にめぐって、その思想の成立について論述する。④『周易』の六十四卦の起源と四徳説について、朱子の考察を論述する。⑤儒家「三省」について、朱子の解釋および日本の受容を論述する。これら五つの問題に表れた學術論争の分析を通じて中國思想史の一側面を描き出す。

本研究は、「求真・述學・客觀・思辨」と概括しうる研究方法および方法論を理論的前提とし、中國哲學史・思想史の具體的なディテールを精査することを通して、中國學術における思想的「争鳴」の實態を歸納的に考察したものである。本研究の方法論は、郭沫若をはじめとする先學の研究成果を重要な参照軸としつつ、筆者自身の研究蓄積を踏まえて再構成したものであり、最終的には個別具體的な問題の検討を通じてその妥當性を再檢證した。また、具體的な問題に即して検討を行うことにより、從來の研究において十分に檢證されてこなかった點、あるいは誤解・誤認されてきた問題点についても改めて論證を試みた。本研究が着目する問題の多くは一見すると學術的細部に屬するものであるが、それらは中國哲學史・思想史の全體的敘述に少なからぬ影響を與える。本研究は、あえて微細な論點に着目することによって、思想史へのもう一つのアプローチの可能性を提示するものである。

・本論文の内容

序章では、中國思想と西洋哲學とを對比することによって、中國思想の特徴を見出し、中國思想史という研究分野の現状と難點を敘述した。その上で、本研究の基本的な立場と採用した研究方法を述べた。

第一章「北辰における解釋」では、「北辰」における定義に着目して、その解釋を整理した。まず、司馬談・司馬遷の『史記』天官書及び『史記』三家注から、「天極星」の定義を確認した。次に、李淳風の『晉書』『隋書』天文志から、「北極」「北斗七星」の定義を確認した。天文家の説と儒教の解釋と比較して、相違點をまとめた上で、邢昺『論語

正義』の説明が不十分な所を指摘した。さらに、辰星・大辰・彗星と北辰との関係を明らかにした。最後に、朱子の説を確認して、三つの問題点を確認した。(一) 天之樞と渾天説との関係問題、(二) 北辰と北斗との関係問題、(三) 北極と極星との関係問題。北辰の解釋史においては天文家の解釋と儒教の解釋が徐々に混ざり合った實態を示して、儒教における北辰の認識は如何に變遷したかについて敘述した。かような論證を通じて、中國思想史上において異なる領域の學者が同一の問題をどのように認識し、各々の研究方法を如何に對比させるかを考察した。

第二章「『無爲而無不爲』に關する再検討」では、道家が重視する「無爲而無不爲」なる語に着目して、その内包を再検討するとともに、『老子』と『莊子』知北遊篇の成立における「無爲而無不爲」思想の變容過程を敘述した。本章はまず、『老子』諸本の首尾呼應から考察して、編集上の問題点・相違点を整理して、異文・衍字が発生した経緯とその背後の編集意圖とを明らかにした。そして、『莊子』知北遊篇の文脈をふまえて、「無爲而無不爲」を、「爲も無く不爲も無し」（爲という概念がない）と讀み解く可能性を論證した。さらに、『老子』三十八章の「無爲而無不爲」は、テキストによっては「無爲而無以爲」にも作るものもあるが、二句は元來、同じ意味であつただろうと推論した。最後に、『老子』と『莊子』知北遊篇の成立における「無爲而無不爲」を検討し、「無爲而無不爲」が最初の「爲も無く不爲も無し」という消極的な思想から、どのように「爲す無くして爲さざる無し」という積極的な思想に解釋されるに至ったかについて明らかにした。

第三章「儒家の『積善』と道家の『積德』——文言傳における坤卦初六解釋を中心に——」では、文言傳の解釋を手がかりとして、先秦期における儒家と道家との善惡（善・不善）觀・禍福觀を考察することによって、文言傳の成立を再検討した。先秦儒家の「善」について、性善説の「至善」は禍福を豫知できるが、「福報」が必ず至ることを保證できない、また「不善なれば必ず禍報有る（不善必有禍報）」ことも言わない。その一方、『老子』における「善」は自然に順應し、法則（規律）に順應する「善」である。『老子』はこのような「善」を積むことを唱え、即ち「積德」のことである。解老・喻老・雌雄節等の道家文獻では、「積德」を解釋する際に、とりわけ「積不德」が招いた惡果を戒める。この点は文言傳と一致する。そこで本章は、出土資料と先行研究を踏まえ、文言傳における坤卦初六の爻辭の解釋は、爻辭の「順」の意に基づいて、『老子』「積德」思想を吸収し、解老・喻老・雌雄節等の解釋を参照して、整理・修正した後に儒家的「積善」の言い方に置き換えたことを論證した。さらに、文言傳の成立は漢初文帝・景帝期、黄老思想が盛行した時期に位置づけるべきであることを敘述した。

第四章「『周易本義』研究一斑」では、朱子の『周易本義』について簡単な考察を行った。まず、『周易本義』と『朱子語類』の成立時期の關係を検討し、その後、朱子による六十四卦の起源に關する問題について論述した。『朱子語類』における互いに矛盾する學説を比較し、それらを整理・提示した上で、最後に『周易本義』を照合した。以上を踏まえれば、『周易本義』に示された學説は、すでに朱子晩年の成熟した結論であると考えられる。さらに本章では、朱子による「元亨利貞」の解釋も考察した。文言傳における「四德説」を手掛かりとし、『程氏易傳』など先行の議論と照らし合わせながら、朱子の考證過程を復元した。本研究は、朱子の『周易』に對する考證が精緻かつ的確であると判断した。

第五章「江戸中後期の『論語』解釋——曾子「三省」をめぐる——」では、曾子の教えをはじめ、「三」の解釋をめぐり、日本の學者はどのように朱注を受容・批判するかについて、その實態を示した。本章ではまず、朱注に對する批判——伊藤仁齋と荻生徂徠の説を確認した。それに對して、懷德堂の五井蘭洲・中井竹山は、朱子學の立場からであるが、

従來の朱子學の解釋に従わず、自ら朱子の眞義を探究し、荻生徂徠の批判に反論していたことを明らかにした。さらに、後來の學者は各々の立場から、獨特点意見を述べていたことを敘述した。本章は諸説を檢證・整理しながら、江戸時代中後期における學術論争の實態を示し、日本における『論語』解釋史の百家争鳴の一面を明らかにした。

終章では、本研究における各章の要點と結論をまとめるとともに、研究の新しい課題と方向性を提示する。